

管内で発生した高病原性鳥インフルエンザの防疫措置における課題と対策

姶良家畜保健衛生所
○安藤佳代子，藤岡康浩，池田省吾

【緒言】令和6年シーズンに管内初めてとなる高病原性鳥インフルエンザ(以下 HPAI)が肉用鶏2農場において発生し、約21万羽の殺処分が行われた。今回、本事例で遭遇した防疫措置における課題と対策について検討したので報告する。

【農場および防疫対応】A農場は約9万羽(38日齢)、B農場は約12万羽(38日齢)を飼養し、A農場はB農場の南東約1.4kmに位置していた。両農場とも同系列で、平飼いのウインドウレス鶏舎であり、死亡鶏増加の通報により緊急立入を行い簡易検査で陽性を確認した。と殺はペール内に炭酸ガスを注入して行い、死体はフレコンバックへ投入した。その後フレコンバックは重機を使って搬出し、埋却溝へ投入した。防疫措置完了までの経過は、A農場は3日間、B農場は2日間であった。

【課題】①A農場では、死亡鶏を入れたフレコンバックが1日以上鶏舎横に置かれた状態であったため、時間の経過とともに鶏の重みによってフレコンバックから体液が漏出した。漏出液は、鶏舎横の排水溝を伝い一般道路側に設置された沈渣槽および貯水池に流入した。これは、フレコンバックの漏出対策が不十分であったことが一因と考えられる。漏出液は、民間事業者に依頼して沈渣槽及び貯水池に貯留した汚泥を含む液体の除去を行った結果、問題発覚の翌日には解決できたため、農場外への流出は無かった。②B農場では、簡易検査陽性確認後の農場調査時に、農場内の敷地が狭く仮設基地の設置が困難と判明した。最終的に近隣の農地を借用することとなったが、土地所有者との交渉までに時間を要した。③B農場では埋却候補地の埋却面積が不十分であったこと、埋却後飼料トラックが進入できなくなってしまうこと等が判明し、急速系列会社が近隣の土地を購入した。④集合基地や仮設基地で使用するトラックやフオーリフト等を操縦する者が限られており資材搬入等の作業が難航した。

【対策】①殺処分作業と運搬・埋却作業の連携やフレコンバックの漏出対策(吸着用資材の使用や死体をビニール袋に入れる等)。②農場立入時に仮設基地設置可能場所や近隣の土地利用状況(地権者含む)の確認。③埋却候補地については、農地整備課との連携や埋却地・仮設基地確認調査票を作成しデータの共有化。④重機等の免許取得者の人員については、市町村等へも協力を要請しているものの、十分な人数が集まらないため、民間事業者等の活用も視野に検討。

【まとめ】防疫作業では、想定し得ない様々な課題に直面することがある。課題を整理し、対策を検討することは重要である。今後の迅速な防疫作業を目指すために、他部署や市町、関係機関の理解と協力を得ながら、連携して取り組む必要がある。今後は、特に発生リスクの高い地域に対して、定期的な農場巡回による飼養衛生管理の指導、及び農場周辺での発生に備えた対策として飼養衛生管理やHPAIに関する情報提供を引き続き実施していきたい。